

<書 評>

奈良 勲（金沢大学医療技術短期大学部）編

理学療法概論

長尾竜郎（富山高志リハビリテーション病院）

我々医療の実践者にとって「概論」とは、もやもやした状況にある我々を、力強い理論や斬新な発想により見とおしをつけさせ、それにより一層使命感や生きがいを感じさせたり、逆にこれではだめだと改革に向け奮いたたせる書物であると考え、その点でもう一步という感じを持ったのは、筆者が当事者（理学療法士）でないせいかも知れない。

内容を紹介すると、まず第1章で理学療法と倫理・哲学を取りあげたのには感服した。今年度の理学療法学会でも哲学講演を盛りこんだ奈良氏であり、当然のことかも知れない。ただこの章を読みながら哲学を教え

ることの難しさを思っていた。ここでは「哲学的理学療法」が効果をあげた自験例でも挿入されたらよかったと思う。

第2章理学療法の歴史がかなり詳しく述べられる。

第3章 理学療法の対象と治療手段では、まず基礎的知識が復習されるが、少し細かすぎで、理学療法における実際問題の説明に必要な程度に絞ったらよいと思った。

第4章 学問的体系化ではよく要点が網羅されているが、やや説明不足の部分もある。なお、抄録の長さを100～500語となっているのは英文抄録のことか。

第5章 理学療法と研究ではもっと身近な議論でもよかったと思う。日米の研究比較は興味深かった。

第6章 理学療法の役割と職域では、現況と展望とが多くの資料と共に述べられた。

第7章 理学療法士の適性、はなかなか興味深い。

第8章 理学療法と教育では、三領野（認知、精神運動、情野）に分けて述べている。また、学習者の立場に立った教育を強調した。

第9章 理学療法士の組織と活動の実態が述べられた。

全般的に格調は高い。ただ外国人名のミスプリントが気になった。やや批判的なことも書いたが、本書がユニークな力作であることは疑いなく、医療関係者が座右に揃えるべき本の一つとして、お奨めしたい。

（A 5, 頁 320, 1984, ¥ 3,200, 医歯薬出版 刊）